

自治生活の新精神

後 藤 新 平

一 世界の煩悶と自治生活

現代の生活は、其の個人的たると、將た國家的たるとを問はず、世界共通の大なる煩悶に陥つて居る。大なる煩悶は、大なる創造に依りてのみ、之を醫し得べきものであり、又必ずや大なる創造を導き出すものである。予が茲に、自治生活の新精神として提唱せんとする。自治第一義、自治中核主義なるものが、果して現代生活に於ける此の煩悶を醫するに足るべき、創造であるや否やは別問題として、現代生活の、求めんと欲して求め能はざる潜まりたる要求が、畢竟、這邊に存せねばならず、又、現代生活の形式が、此の精神に合致するにあらざれば、人類生活の平和と向上とが、今日以上に望まれぬであらうと信ずる。

二 自治は人類固有の本能也

世の所謂自治なるものは、セルフ・アドミニストレーション若くはセルフ・ガヴァーンメントを謂ふのである。元來、此の自治なるものは決して新しい意味のものではなく、人類に固有して居る本能である

總ての生物には、自衛と謂ふ作用が本能的に存して居る。此の自衛と謂ふことが、即ち自治の一種である。斯く生物が自治の本能を有つて居るが如く、別けて人類は自治の本能を有つて居る。此の自治なるものが、本能的に起因せし自然。作用より、經驗的に發達して法制的作用を形成するに至つたのが、現代生活の形式であるが、更に進んで、自律的に働いて科學的作用に到達せしむるのが、予の所謂自治第一義、自治中核主義である。

三 我が三千年の歴史の誇り

然れば、自治なるものは、我國にありても、決して舶來の精神でなく三千年の古から存在せし所のものである。其の表現の形式や名稱が時代と場所との相違に依りて異りこそすれ、其の個人的生活に始まり、社會生活、國家生活に及ぼせし、運行發達の經路には、何等の變りがない。儒教に、格物致知誠意正心修身齊家治國平天下と謂ふのも、自治の精神を説いたに過ぎないのである。然も、自治の貴ぶべきは、斯くの如く、其の淵源する所が古いが爲ではない。徒らに古きを貴ぶのは、骨董を弄ぶと同然である。人類文化の價值は古きを以て貴しとはせぬ。時代の推移に伴ふて、其れ命維れ新たなる所にあるのである。我國三千年の歴史の誇りも亦、祖先傳來の精神を堅持して、而も常に其れ命維れ新たなる所に存するのを忘れてはならぬ。

四 人類生活の大改造と人類の共同責任

歐洲大戰勃發の原因は、之を哲學的に觀察すれば、近代文明が不自然であり、不具であるが爲、人類の内部の要求と外部の生活とが調和を缺いて居る所に、存在したとも謂はれるであらう。即ち、人間生命の活火が、虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとして爆發したのである。斯くの如く、今回の歐洲大戰が、人類生活の大なる缺陷に基く、大なる動搖である以上、將に來らんとする平和は、人類の物質的生活、精神的生活に世界的の大革命大改造を齎すべきは當然の次第である、此の人類生活の世界的大革命大改造をして、意義あらしむると否とは、今後、世界人類の平和に關係すること頗る大なるものがある。而して、是れ實に、現時に於ける世界的人類の共同責任である。

五 舊文明の總決算と新文明の創造

惟ふに、世界人類の歴史ありて以來、今日の如く、文明の急激なる廻轉期に際會したることは、未だ曾てないであらう。随つて亦、今日の如く、世界の總人類が尊き試練に逢着したこともないであらう。此の試練に對する、世界人類の偉大なる總努力、總苦腦が、即ち、既に生命を失へる舊き文明を破壊して、最も自然なる、最も健全なる新しき文明を創造せんする産みの苦しみである。此の産みの苦しみにより弾き出される所の總決算は、一に、世界人類の生活的自覺に俟たなければならぬ。何をか生活的自覺と謂ふ、是れ即ち、自治生活の新精神に對する理解を謂ふのである。

六 文明生活と國家の國發的發展

文明生活の要義は、國家國民の經濟的發展、文化的發展を期するにある。國家國民の文化的發展を期せんと欲せば、先づ内に國民の精神的生活の、豊富、充實、健全を企圖せなければならず、國家國民の經濟的發展を期せんと欲せば、先づ内に國民の物質的生活の、豊富、向上、改善に努力せねばならぬのは、言ふ迄もないことである。而して、今日の文明生活は、然なきだに、其の生活に必要とする資源、即ち物質的生活に要する資料、精神的生活に要する資料、之を別言すれば、各般の生活の必要缺くべからざる物質的諸要素、精神的諸條件を、廣く世界的に求めなければ國家としても、將た個人としても、完全に存在出來ぬ實勢となつて居るから、國家の國際的發展に俟つべきものが頗る多い。

七 抜本的更始一新の必要

然るに歐洲大戰は人類の物質的生活、精神的生活に、世界的大動搖を招來せしが爲め、前述の如く、今日の文明生活が、其の生活資源を、廣く世界的に求むることを必要とし、天意も亦之を認めて居るに拘らず、人爲に基く實際は、此の必要と天意とに裏切つて、自給自足なるものを餘儀なくせしめんとして居る。是れ實に、現代生活の矛盾であり、悲哀であり、其所に亦、經世家の心を潜むべき大なる或ものが存すると同時に、新たに國家の國際的發展に俟つべき多くの或もの存することを證據立てて居る。然れば、戦後に處するに於て、國家としても、亦國活としても、諸般の施設經營は勿論のこと、各種の生活氣分に於ても、抜本塞源の更始一新を必要とするのである。

八 社會の進歩と社會的要求の複雑多端

斯くの如く、今後、國家の國際的發展に俟つべきもの頗る多きに加へ。社會が進歩すればする程、社會階級も複雑となり、多數となる。社會階級が複雑となり多數となるに伴つて、社會的要求も亦複雑となり繁多となる。殊に戰後の生活は、より科學的に、より精神的に、より情意的に、より實際的に傾かねばならず、又、必ずや爾あるならんとは、予の宿論である。斯くの如き、複雑繁多なる時代の要求を洞察し、調和し、統一し、貫徹して、國家國民の總生活を、弛緩なく、澁滞なく、不均衡なく、向上發展せしむると云ふことは、單純にして而も劃一を主としたる官府政治——御役所政治、御役所政治を以てしては、到底、期すべくもあらぬことである。社會が進歩すればするに伴ふて、國家の政治に不平不満の多くなり、其れが爲めに、社會の不安不穩を惹き起すのも、之が一つの理由と謂へるであらう。

九 官治の効力と自治の効力

元來、國家的生活以外、個人的生活の處理迄をも、悉く官治に委ねんとするが如きは、舊思想舊形式の政治であつて、決して新しき思想新しき形式の政治とは謂へぬ。自ら治むると云ふことは、實に道德上のみならず、政治上に於ても、最も必要なる條件であらねばならぬ。之を實際に徴するも、我國際的産業發展上に、尠からの影響を及ぼす所の、彼の粗製濫造の取締りと云ふことなども、官府行政の力のみを以てしては、到底之が取締りを完うすることが出来ぬが、各其の産業自治體の自治的作用を俟つ

て後、初めて其の目的を完全に達し得られるのである。例之、輸出生絲試験所、輸出生米検査所の如きが即ち其の好適例である。

一〇 生活様式生活氣分の大革命

殊に、此の世界の大變局に際し、然なきだに、國家の國際的施設經營、彌々、多端となり、國民各階級の生活的要求も亦、倍々、複雑繁多とならんとする今日に方りて、單純にして而も劃一なる官府政治が、如何にしても、此の複雑繁多なる諸般の要求に、應じ切ることが出來ぬであらう。然れば此の世界の大變局に伴ふ、國家國民の國際的並に個別的諸生活の大動搖に際し、宜しく國家國民の總生活を統制し、緊張し、向上し、發展せんと欲せば、國家國民の各般の生活様式、生活氣分に、一大革新を必要とする。是れ實に、予が、自治第一義、自治中核主義を提唱せんと欲する所以である。

一一 自治は國家の有機的組織の根本也

自治の振作と謂ふことは、予が宿昔の志である。曩に、時弊に感ずる所あつて、同憂の士の參考に資し、併せて諸君子に訴へんが爲に、自治團綱領草案なるものを印刷して、廣く頒布したことのあつたのは、世人の記憶に新たなる所であらう。抑も、自治と云ふことは、官治と云ふことに對して起つた言葉であつて、官治行政の力及ばざる所を補ふて、國家の目的を達する作用である。而して、自治なるものは、國家の有機的組織の根本であり、國家の基礎となして居る所の一つの原則である。自治生活の要義

は、國家各自の公共的精神を涵養し、披瀝し、一致團結、以て相互的協力の美風を作興するにある。換言すれば、確乎たる協同的觀念に依準して、地方團體の文化的、並に經濟的發展を促し、國民相互の福利を増し、各部各體、調和融合、以て國家機能を靈活ならしむるを目的とするものである。然れば、自治生活は、國家の活動力の源泉たり、國家の憲政的活動の練習所ともなるから、凡そ國家憲政の建立は健全なる自治生活を基礎とせなければならぬ。

一二 地方自治は自治生活の一部形式のみ

今次の歐洲大戰に方りても、國家の自治機關の健全なると否と、國家の自治的精神の旺盛なると否とが、直ちに列國國力の強弱に關する事の、極めて大なるものあるを立證したのは、世人の知悉する所であらう。國家生活に於て、自治の重要なことは、夫た斯くの如くである。然も、從來説く所の自治なるものは、人類生活の全姿態全形式の、僅かに一小局部に於ける、自治生活を説いたに過ぎないのである。即ち、官治に對する自治、官治行政に對する自治行政を説いたに過ぎないから、未だ之を以て、予の所謂、自治第一義を説き盡したるもの、自治中核主義の全精神を説明したるものであると言ふことが出来ぬ。

一三 自治生活とは人類生活の總名也

然らば、予の所謂自治第一義自治中核主義とは何ものを意味するのであらうか。予の所謂自治第一義

自治中核主義と謂ふのは、自治生活の範圍に於ては、單に官治行政に對する官治行政と云ふが如き、區切られたる狭き生活形式にのみ止めず、廣く人類の文明的生活の全形式に及ぼすにあり。又、自治生活の作用に於ては、其一切を、更に一層、生物學的原理、科學的原理を基礎とせよと云ふのである。即ち自治的能力なるものは、一切の生物、一切の細胞に、本能的に備はつて居るものである。殊に高等の生物たる人類にありては、該能力を、常に本能的に備へて居るのみでなく、更に理智的に發展して居るべき筈のものである。語を換へて言へば、自治生活なるものは、人類生活の自然的所産であり、自然的發展であるから、自治生活とは、人類生活の總名であると謂つても、決して過言ではない。此の人類生活の自然的所産である所の、生活形式たる、自治生活を、文明生活の總ての形式に擴充せしめて、其の自然的發展を遂げしむるのが、予の所謂自治第一義の眞精神である。

一四 自治生活と世界人類の平和

文明生活は、何等かの生活形式を離れて、個人の社會に存在を認むることが出来ぬ。語を換へて説明すれば、個人が社會的に生存して居ると言ふことは、其の個人が、何等かの社會生活の一部に觸れて居ること、即ち、何等かの生活形式の一地位を占めて居ることである。而して、今日の文明生活は、社會的生活を離れて、一個人だけの單一孤住なる生活は許されもせなければ、出来もせない。然れば、國家生活の總體より見れば、生活の單位たるべきものは一個人ではなく、共同の目的、共同の利害、共同の習慣、

共同の感情を有つて居る所の、諸般の地方的、業務的、階級的、及び精神的な生活各種の生活、形式即ち各種生活體でなければならぬ然れば、自治生活の單位も亦、此等各種生活形式、即ち各種生活體でなければならぬのは、いふ迄もなき次第である。而して世界人類の平和は、此各種生活體の共同の目的、共同の利害、共同の習慣、共同の感情が、世界的に醇化し、向上し、發展する所に、基礎せらるるに於て始めて其の目的を達し得らるるのである。

一五 國家の基礎は生活の健全なる發達に存す

若し夫れ、國家と國民との關係を、有機體と細胞との關係に比すれば、國家生活の總體は、有機體の機能であり、各種生活體の働きは細胞の働きと同様である。即ち各種生活は國家生活の一部機能であり國家は其の機能の働きを俟つて、始めて國家の働きを完うするものである。然れば、國家の健全なる發展を期せんと欲せば、國家生活の一部の機能たる、各種生活體の健全なる發展を期せねばならぬ。各種生活體の健全なる發展を期せんと欲せば、各種生活に特有する、特殊の目的、特殊の利害、特殊の習慣特殊の感情に順應したる、生活態様、生活作用が行はねばならぬ。斯くの如き、生活態様、生活作用の行はれんことを欲せば、各種の生活體の自治を助長せしむるより外に適當なる方法はないか、然れば、國家の健全なる發達も亦、自治生活の健全なる發達に俟たなければならぬ道理である。

一六 自然の要求たり時代の要求たる自治生活

斯く各種生活體の生活態様生活作用を、各其の特殊の事情に順應さすと云ふ事は、即ち、生活作用を科學的たらしむる所以である。然も、斯くの如きは、自治生活^{を俟つにあらざれば、到底行はるべくもあらぬことである。}殊に、社會が進歩すればするに伴ふて、生活形式が、彌々倍々、複雑となり、多端となり、人類生活の處理が、層一層、科學的たり、合理的たり、實際的たらざるを得ざるに加へ、國家の國際的活躍益々繁劇となる以上、人類生活の全姿態、全形式に對する、僅かに一小部局に過ぎざる、地方行政の自治をのみ認むるが如きことに依りて、如何にして、健全なる國家の發達を期することが出来るであらうか。是れ即ち、人類生活の自然の要求としてのみならず、時代の必然的要求として、自治第一義の必要なる所以である。

一七 文明生活の唯一最上の形式

更に、之を具體的に説明すれば、予の所謂自治第一義、自治中核主義と謂ふのは、國家的生活に直接關係し、且つ直接關係せしめざるべからざる種類以外の、總ての國民生活を、一切、各生活體自身の自治機關に委すべしと主張するのである。即ち、國家の綜合的的生活に直接せざる、諸般國民生活の處理を、自治^{を以て中核とせよと提唱するのである。}之を細説すれば、國家の軍事、外交、司法、警察、及び立法事業を始めとし、其の他、國家の國際的的生活に關係し、若くは關係せしむるを必要とする事項、國家の施設經營に俟たざるべからざる事項、國家の施設經營に俟つを以て得策とする事項を除く以外の、諸般

の地方的、業務的、階級的、及び精神生活的の各種團體生活を、其の生活體各自の自治に委すべしと説くのである。嘗に、生活體各自の自治を、其の自治に委すべしと説くのみでなく、生活體各自の自治に委せらるべき部分の生活を、各種生活體の自治的協力に依りて、之を調和し、統一し、綜合して、而も、其れを國家の意思、國家の理想、國家の目的、國家の活力に、渾一融合せしむることをも、各種生活體の自治に委すべしと言ふのである。斯くありてこそ、國家の生活も、個人の生活も。俱に與に、能く調和、統一、綜合されるのである。然れば自治生活は、文明生活の唯一最上の形式と謂ふべきものである。

一八 今一步を精神的に進め

若し夫れ、現在社會に於ける生活態様を、單に其の形式上のみより瞥見すれば、予の此の主張は決して急激なる新規の説ではないのである。即ち、現に各種生活の形式を通觀すれば、其の地方的なるものには、市町村の自治團體があり、其の義務的なるものには、在郷軍人團、青年團等があり。其の精神的なるものには、各種の學術團體、教育團體、宗教團體がある。然も、此等各種の生活體は、量に集合的形體あるのみで、予の所謂自治第一義の精神を備へて居らぬ。嘗に其れのみでなく、國民の文明的生活の總ての形式に互りて、其の結合體をなし居らざるのみならず、各種生活體の諸般の意思や要求を、各種生活體の自治的協力に依りて、調和し、統一し、綜合し、之を以て、國家の意思、理想、目的、活力とならしむるの準備もなければ、左様なことには、思ひ及んで居らぬやうである。然も及ばずと雖も、

其の實際上の必要に促がされて、其の形式だけに於ても、斯く既に其の一步を進めて居るのである。然れば、今一步を、其の精神的に進むるのは、決して難事ではないのである。

一九 國民の生活的要求

然れば、未だ團體的作用をなさざる各種の生活に向つては、先づ其の團體的自覺を促がし、而して、此等生活體及び其の他の生活體に對し、自治第一義の精神を注入し、且つ、此等總生活體を一貫するの組織あらしめて、國家の自治的機能を緻密にし、敏活にし、的確にして、諸般の自治生活をして、國家國民の總生活の中核とし、其の總生活を、調和、統一、綜合して、科學的、合理的、實際的ならしむることによりて、國家國民の經濟的發展、文化的發展を期することか、新時代の政治的要求であり、國民の生活的要求であらねばならぬ。

二〇 人類社會の遠心力と求心力との調和

自治は、互助に依りて完全に行はざるべきものであるから、自治的精神は、また互助的精神として現はれる。然れば、斯くの如く、國民生活の諸多の作用を、自治に委するに於ては、人種所有の利己的性情と社會的本能とより發する、遠心と求心との二大原動力も、自治的精神の自覺に依りて、例之、一方に、適者生存と謂ふ、冷かなるの進化理法が壓倒的に働くと同時に、地方には、人類の相思相愛と謂ふ温かなる宗教的信念が働くが如く、隨時隨處に、適當なる綜合と分析との微妙たる交互作用を生じて、

人類の共同生活に於ける集注と分裂との兩機能を巧みに調和し、統一して國家の有機的機能を益す義務あり、價値あり生命あるものとならしむるであらう。物質生活の行詰り、示教的信仰に其の疏通の途を求むるより、外なく、而して自治的精神に徹底すれば終に宗教的信念に到達するものである。

二一 自治精神と生命力の無限發展

自治的精神は、また自主的精神である、而して國民なるものは常により高きより全き状態を求めて、向上せんと欲しつゝある無限活動の統一體でなければならぬ。然も、自治的精神、自主的精神の伴はざる無限活動は、常に危険なきを免がれぬ。之に反し、此の無限活動の統一體にして、自治的精神、自主的精神が旺盛ならんか、其れが自己獨特の大創造力となり、無限無窮に改造の努力を續け行くの大精神となり、隨つてまた民族主義、國家主義の大觀念となつて、内にありては、國民生活に無限の緊張力、無窮の生命力となり、外に向つては、靈活なる生々不死の發展力となるであらう。今の世、概して自主的精神の乏しくして、社會の各方面に、或は笑ふべく、或は悲しむべき現象の存するは、自主的精神の缺くるが爲である。

二二 人類の文明と自治的精神

人類の文明は、人類の共同生活を以て其の目的とするものである。人類の共同生活を以て其の目的とするものは、人類の共同生活を以て其の目的とするものである。人類の共同生活を以て其の目的とするものは、人類の共同生活を以て其の目的とするものである。

斯く、國家の生命發展の活動が、自治に依りて強められ、深められ、廣めらるゝ所に、國家の發展が予の所謂生物學的原理、科學的原理に順應しつゝ、善良に醇化し、調和し、發達して行くのである。カントが人格なるものを以て「自由行動者」であるとなし、ベルグソンが「生命は絶えず新しき自己を創造しつゝ進化し行く所の無限創造の力無限發展の力である」と言つたのも、同じい道理である。斯くありてこそ、單一なる一個人の國民的運動も、三世に貫通し、内外に透徹する、不朽不滅の努力であると言ふことが出来るのである。若し夫れ、自治の精神が徹底して此處に到達せんか、國家生活と個人生活との調和も取れて行けば。人類の内部の要求と外部の生活との調和も取れて行く、當に、國家國民の健全なる生活が具現せらるゝばかりでなく、終には、世界永遠の平和も、亦此の精神に依りて保たれ、人類總體の健全なる生活が實現せらるることとなり、人類の文明は、人類の自治的精神より咲き出でたる花であると謂はれ得るであらう。以上説く所が、即ち、自治の新精神であり、自治の眞主義でなければならぬ。而して之が亦、予の所謂自治第一義、自治中核主義に外ならぬのである。

二三 理想の現實化と自治的精神

人類生活の不斷の努力は、單に衣食の事、生存の事のみを目的として居るものでなく、各自其理想の實現を志して居る所に、人類生活の尊さが存するのである。此の人類生活の不斷の努力は、一に各種自治生活を通してのみ、最も合理的に發現せらるべきものである。而して、理想の極致は、眞、善、美の三

語によりて表象さるべき絶對普遍的壯嚴世界であらねばならぬ。斯る理想境に到達するには、理想其の者を、特殊的、具體的、實際的事情に同化せしめて、理想を特殊的、具體的、實際的生命あるものとなさねばならぬ。實際的事情を超越して、理想を現實化せしめ得る筈はない。斯くの如く理想を特殊的、具體的、實際的事情に同化せしむることは、各種の理想を、自治生活の有機作用の下に於て、各種の自治生活體には順應合致せしむるより外にない。然れば、人生を醇化し、向上すべき、理想の實現と言ふ人類生活の不斷の努力は、其個人的たり、民族的たり、將た國家的たるを問はず、自治精神の作興と伴つて、始めて其の目的を達し得るものなることは、更に絮説する必要がない。而して各種の自治生活に、理想の實現と云ふ目的の伴ふことに依りて、人生は益々醇化さるるものである。

二四 自治生活は自覺に満ちし生活也

凡そ世に、自分を最も能く理解する者は、自分自身より外にないから、社會生活に關する諸般の要求希望を、最も鋭敏に、最も的確に自覺し、理解する者は、各、其の生活の自治體でなければならぬ。故に、彼等の生活を彼等の自治に委すと云ふことは、自分の生活を自分が支配し、自己の運命に對しては自己が責任を負ふと云ふことになるから、其の政治的たり、社會的たるを問はず、齋す所の善き結果は、自己の功績として、自治能力の奨励とはなり。其の惡しき結果と雖も、自己の責任觀念の刺激となり、また自治能力の鞭撻ともなる。然れば、其の惡結果の何たるを問はず、其の甚く所は、自己の責任

なるを以て、不平不満を惹起することなく、随つて、會社的不安不穩の原因ともならぬ。斯くして社會各般の生活は、總て自覺に満ちたる生活となる。而して自覺に満ち生たる活が、健全なる社會、健全なる國家を形造ることとなるのは、今更、説く迄もないことである。斯く自覺に満ちし生活に、果して何等の澁滯、何等の危険が伴ふであらうぞ。

二五 自治精神は民主思想を同化する

彼の今や世界の大勢と見られつつある民主思想なるものも、一種の見方より觀察すれば、等しく是れ自分の生活を自分が支配し、自己の運命に對しては、自己が責任を負ふと云ふ精神から胚胎して居るものとも言はれるであらう。然れば、我國にありては、此の自治第一義の精神を擴充して、各種自治生活の、發達改善に力を須ひたならば、外來の民主的思想は、見事に内在の自治の新精神に同化され、何ぞ知らん、所謂民主思想は、外來思想にあらずして、内生思想、否、各人固有の思想なりと言はるるに至るであらう。茲に於てか、所謂民主思想なるものは、我國一部人士の憂ふるが如き、危険なるものでなく却つて、自治の新精神を養ふの材料ともなるであらう。然れば、彼の民主思想を蛇蝎視する人々も、自治第一義の精神を、擴充して、具體せしむることに依りて、其の心中の不安を一掃することが出来るであらう。

二六 我國體と自治精神

殊に我日本帝國は、家族制度の最も堅實完全に發達し、具現せられたる國家にして、畏くも、皇室は大日本帝國と云ふ一大家族の總御本家であり。國家の元首で在らせらるる 天皇陛下は、又、大日本帝國といふ一大家族の家長で在しますのが、我皇統の萬世一系、連綿として盡さざる所以であつて、其れも又、金匱無缺の國體として宇内に誇りとされ得る所以であり、其所に又、我國に於て、自治の新精神の最も能く發達し、具現し易き理由が存して居る。

二七 自治的能力と普通選舉

我を失はざるの民にして、初めて自治の力あり。自治の民にして、初めて眞正の自由がある。而して自治の力は、内にありては、相互幫助の精神となり、外に對しては、協同一致の發展力となるから、既に斯の民にして、自治的能力の備はるものと認められ得る以上は、其の參政權の如きも、斷じて今日の如き狀態に止め置くべきものでなく、一日も早く、進んで普通選舉の程度に迄擴張すべきものである。國民の參政權を斯る程度迄擴張すると云ふことは、また國民の自治的能力を發達せしむることとなる。若し夫れ、斯くの如くにして、自治精神が擴充されて、國政の上に實現せんか、其れが眞の民意代表の實際的政治であると同時に、道理に適ひたる科學的政治であると云はなければならぬ。斯る政治は、縦しや如何なる形式に依りて現はるるにせよ、其は實に、上から考へ出して與へられたる政治でなく、下から生み出されたる政治であり、外から導かれた政治でなく、内から湧き出た政治であるから、内、人

心の統一となり、外、國力の發展期して待つべきものがあるであらう。

二八 自治を離れて樂土なし

斯くの如く國家の政治が、諸般の自治生活と、緊密にして痛切なる接觸を保ち、國民の心の底より出でたる要求希望が、直ちに體現せらるるが如き、眞劍なる政治の行はるる所に、何の國民的不平があらう、何の國家的不安があらう。予が、豫てより、自治を離れて吾人の生活すべき樂土を、出すこと能はずとの信念を有する理由は、即ち、茲に存するのである。

二九 政黨政治と自治生活

或は曰はん、政黨政治なるものは、是れ又、自治の新精神に合致したるものではないかと。然り、政黨政治なるものは、或意味に於ては、素より、自治の新精神に合致したるものがないでもない。然しながら、政黨政派なるものは、國の政治上の事柄、即ち、大日本帝國と云ふもの全體から見て、斯うしたら善からう、彼あしたら悪からうと云ふ風に、各、其の觀る所に依りて、離合集散するのが、其の本體であつて、自治生活と云ふことが其の本體となつて居らぬ。然れば、各種自治生活体の綜合意思は直ちに國民の總意、若しくは輿論と言はれ得るけれども、一政黨の黨議は、往々之を以て、直ちに輿論を言ふことは出來ぬ原因も此に存する。各種自治生活体、及び其の聯合体は、各、自己の自治的機能の下に、直ちに自己の生活を支配することに依りて、國家生活の一部を支配する事が出来るが、政黨政

派は、自己の内閣が組織せらるるにあらざれば、其の生存の目的とする國政の支配に、直接することが出来ぬ。

三〇 政黨も亦一種の自治生活体也

又、今日迄の政黨政派、及び現在の政黨政派は、餘りに濃く黨争的に彩られて居るから、廣く人材を糾合し、廣く天下の智識を包容することが出来ぬが、各種自治生活体には、左様な弊が件はないから、其の生活上の必要に應じて、廣く自由に、天下の人材を吸集し智識を網羅することが出来る。殊に政黨政派は、多數黨たるにあらざれば、其の生存の目的たる國政支配の任に膺ることが出来ず、又、常に黨争を是れ事として、地方自治に迄、其の弊を及ぼして居る。然も、自治生活の新精神より謂へば、政黨政派も亦、自治生活體の一種としては、自治總團の一員として、共通の利害を有し、自己の進歩發達を期せんには、自治總團の自治的機能の働きに俟たなければならぬ。而して、政黨が自治的機能の下に作用するに於て、其從來の弊害を矯正し、缺點を補充することが出来るのである。

三一 治道の要は自精治神の作興にあり

之を要するに、治道の要は、國民の精神的生活を、豊富、充實、健全にすることが其の二にして、國民の物質的生活を、豊寧、向上、改善することが其の二である。而して、民心を統一し、國家主一の目的に向つて、國民の全智、全能、全力を集中し、國家の進運をして、駸々乎として盡さず淀まざらしむべく、

國家的理想、國民的信條を樹立することが其の三でなければならぬ。此の第一第二の目的を達する上に於て、自治の必要なることは、最早繰返す必要はない。此の國家的理想、國民的信條なるものも、其れが國民の各種生活の痛切なる經驗より、湧き出でたるものでなければ、之に依りて民心を鼓舞し、維持することが出来ぬのは、改めて言ふ迄もないことである。茲に於てか、予は、一にも自治第一義、二にも自治第一義、三にも亦自治第一義と、自治精神作興の必要を強説せざるを得ないのである。内に、斯く自治的精神の作興ありてこそ、外に國家の發展ありて、國際的にも、成功を遂げ得るのである。自治第一義、是れ獨り予のみの唱道すべき題目でなく、現代生活の壓迫より漏れ出づる所の、共同的叫びでなければならぬ。

三二 社會の總生活と自治機能の共同作用

予は、以上絮説したる見地に基き、曩に發表したる自治團綱領に、時代の進運に伴ふ、適當なる改訂を加へ、其の目的を達するが爲に、自治團及び自治聯合團を組織することに就て、更に廣く天下の識者及び同憂の諸君に向つて、問ふの機會があるであらう。其組織内容の如何なるものであるかは、之が言明を後日に留保する。然し、此の自密團及び自治聯合團の組織に依りて、自治生活の新精神を鼓舞し、社會各方面の生活團體を、刺激せんか、學者たり、教育者たり、宗教家たり、實業家たり、藝術家たり、辯護士たり、操觚者たり、官吏たり、黨人たり、將た其の生活部面の何たるを問はず、苟も社會總生

の一限に、何等かの生活を營むものは、此の自治團及び自治聯合團の、有機的組織の一分子として、自治機能の作用の下に、互に相依り、相助けて生存することが、自己の精神的生活と物質的生活を、向上發展せしむる上に於て、甚大の効果あることを自覺せざるを得ぬであらう。假令ば、一個人が、其の生活の立場として必要とする、幾多の精神的資源、物質的資源を、社會に要求する上に於て、個人の力の及ばざるものあり。而も國家の力を借りるには、餘りに縁遠きものあり、茲に於てか、自己の生活自治體の力を借りるの必要を最も痛切に感ずるであらう。要求は進歩の拍車である。如何に社會に超然たらんと欲する者と雖も、苟も進歩性を有するものは、何等かの要求を有つて居らなければならぬ筈である。何等かの要求を有せんか、茲に其の要求を貫徹すべき最も手近の方法として、自治機能の共同作用に頼らざるを得ざることを自覺せざるを得ぬであらう。

三三 自治の極致は正義也

斯くして、各種主活自治體が、互に他の生活自治體を以て、同じ自治機能の共同作用の下に働く所の生活、即ち、一大家族内にありて共通の生活利害を有する同胞と視ることに依りて、相互間の同情と理解を増し、互に他の生活に對し、物質的精神的の社會的認識と尊敬と、代價とを拂ふことを辭せぬことになるから、國家社會の統一と平和と發展とに必要なる、協同一致の精神が、限りなく助長せられるであらう。自治の機能が、這邊に達したならば、社會に理不盡なる不公平もなければ、不平等もなく

随つて、不満もなければ、不平もなくなる道理である。斯くの如くして自治と正義とは合致し合體すべきものである。即ち、自治の極致は正義である。古人は「君子は本を移む本立ちて道生ず」とか謂て居るが、之を社會生活の上より謂へば、本を移むることは、即ち、自治のことであり、自治立ちて、其所に道生するのである。

三四 國家社會政策と自治社會政策

當面に於ける最も緊急にして重要な問題たる社會政策の如きも、元來が、國家の施設にのみ屬せしむべきものでなく、其の多くは自治の機能に委するを以て適當となすべきものである。其の然らざる所に社會政策の必要倍々急にして、其實行彌々遲緩を極むる理由が存するのである。若し夫れ、社會政策の實行を、自治生の活機能に任せんか、各種生活體相互の同情と理解とに依りて、各自が必死の生活的要求は、必ずや看過せられず、杜塞せられるであらう。予は、諸般の社會政策は、之を國家の施設に委ぬるよりも、自治の機能に任するを以て、其の效果の一層適切なるものあるを信するが故に、所謂國家社會政策なるものに對して、自治社會政策の殊に必要な所以を、強説せざるを得ぬ。將に起らんとする社會的危險の伴ふ至難の案件たる、彼の勞働問題、殊に資本家對勞働者問題の如きは、國家行政の力のみを以て、解決し得べき問題であるなどは、何人と雖も信することが出來ぬであらう。斯くの如き問題は、自治機能の靈感に促されたる、自治體相互の自覺より生ずる、同情と理解との解決に俟つより

外にないと思ふ。

三五 自治社會政策と紳士税

自治社會政策の實行には、素より夫れ相當の資源を必要とする。其の資源は、紳士税に依らなければならぬ。何をか紳士税と謂ふ。予の謂ふ紳士税とは、物質的生活に於て餘りある者は、其の餘りある物質的資源を以てして、社會に奉仕することである。又、精神的生活に於て餘り有るものは、其の餘り有る精神的產物を以てして、社會に奉仕することである。社會奉仕とは其報酬を求めざる處に有るの言ふ迄もないことである。富豪階級が、其の餘りある物質的資源を吝みて容易に散せず、智識階級が其の餘りある精神的產物を、報酬伴はざれば發表せぬ。茲に於てか、勞働階級も亦、其の餘りある勞力を吝むのである。若し夫れ、物質的精神的紳士税にして、惜氣もなく拂はれんか、勞力も亦、勞働階級に依りて惜氣もなく拂はれるであらう。斯くして、自治生活の總社會は、義務的觀念、公共的精神、共同的意氣の充ち滿ちたる。平和にして氣高き境地と化するであらう。

三六 人類相互の同情と理解の鎔爐

以上説き去り來りたるが如く、自治機能の共同作用は、實に、人類並に各種自治生活 相互の同情と理解の鎔爐である。然も、宇宙間、人類の生存する限りの廣き廣き地上をして、斯くの如き理想境となすには、自治生活の眞意義に對する、世界總人種の共同理解の成り立つべき、時の力を俟たなければ

らぬ。然りと雖も、徒らに手を拱きて時の経過を待つは、理想に忠實なる所以でない、既に同じ共同生活の必要を自覺したる吾人としては、事實の上に於て、自治共同生活の最も床しき模範を示し、自治共同生活の清けさ美はしささを、世界の人心に、廣く廣く、深く深く浸み込みまじむることに努力せなければならぬ。其の一つの手段としては、自治共同生活の樂土の縮圖とも謂ふべき、予の所謂自治會館なるものの建設を必要なりと信ずる。

三七 自治共同生活の模範たる自治會館

此の自治會館なるものには、講堂もあれば會議室もあり、研究室もあれば談話室もあり、休憩室もあれば默想室もあり、各種の運動場もあれば各種の娛樂室もある。其の他圖書室は勿論のこと、食堂、浴場、理髮所、雜貨賣店の設けもあることとするのである。即ち、大袈裟に言へば、人類の各種職業生活に特殊に要求さるべきものを除く、人類生活の一般的に必要なとする、精神的物質的の必要條件を具備して置き、其の食費、雜貨及び其の他の對價を要する者は、素より實價を以てするのである。而して其の階級其の業態の何たるを問はず、苟も自治團員たる者は、自由に此の會館に出入して俱に樂み、且つ各種自治生活體及び自治聯合團の會合や協議をなし得るのである。殊に、此の會館の裡にありては、現代の實際生活に於ける、階級的を始めとし、其他一切の煩鎖なる差別が撤去せられて、人格と人格との交際、心と心との接觸を目的とするのである。然れば、此の會館内に在りては、單に物質的精神的の趣味

嗜好の異ると云ふ差別の存するのみにて、何等の障壁の存するなく、大禮服と印半纏とが、談笑もすれば會食もする。軍服と前垂掛とが、議論もすれば遊戯もすると云ふことにならねばならぬ。

三八 物質的生活の行詰りと空想の力

殊に予が、最も多くを期待して居るのは、各種階級、各種生活團體の人々が、一日の常務を終へた夕方より、此の會館に集まりて、放論談笑の間に、各自の生活、各自の氣分を、相互に理解せしめ合ふことである。斯る間に、各種階級、各種生活に對する特種の理解も出來、隨つて人類間の同情なるものが非常に廣く、深く、強くならざるを得ぬ。斯くして人類相互間の同情が灼熱に達する以上、隨時隨處に必ずや一種の靈活作用を起して、何ものを融解せずんば止まざるものである。斯くの如くにして、自治會館なるものは、人類並に各種自治體相互の同情と理解との熔爐となるであらう。人或は、予の此の考を以て一想となすかも知れぬ。然りながら諸君、現代の物質生活は、今や行詰りの極點に達し、此の儘で推移せば、最早壞顏か爆發の外はない。惻巧振りたる人間の智力の、現代文明を維持するに足らなかつたことは、歌洲大戰の勃發に依りて證據立てられた。然れば此の上に、惻巧顔する人間が空想とする其の空想の力を頼むより外にはないか。其所で、現代生活の行詰りを疏通し改善し、社會の治平、民人の福祉を維持し増進せんと欲せば、最早、大禮服と印半纏とが、握手し、談笑し、會食するを憚らざるだけの、相互の勇氣と、度量と、理解と、同情とが進展せなければならぬ。

三九 此の世ながらの俱會一處の淨土

時の流は人々の眠つて居る間にも進み進みて止まぬのである。此の時の流の堰かれ堰かれて汎濫せぬ前に、大禮服と印半纏とに、何等の留意なく、握手し、談笑するの勇氣と、度量と、理解と、同情とが起つたならば、勞働問題、殊に資本家對勞働者問題を始めとし、人類の智力が最難問題となす幾多諸案件の始きも、人類の心と心の間にのみ相通ふ、同情と理解との力に依りて、尋常茶飯事として解決せらるべき筈だと信ずる。這般の妙境が即ち自活の生み出す樂土である。佛教の言に、俱會一處と云ふことがある。之は佛も衆生も俱に淨土に生れ會ふと云ふ意味であるが、吾々は、彌陀の本願に依りて、淨土を後世に求めないでも、自治の本願に機りて、此の世ながらに、俱會一處の淨土が拓かれるのである。若し夫れ、以上説く所の、自治第一義の精神が、廣く天下に容れらるることに依りて、報公の微忱を效すことが出来たならば、予の満足之に過ぐるものがない。